

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 玉川学園教育研究活動等点検調査委員会大学分科会教務部会

(責任者名) 伊従記章
 (役職名) 教学部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムは令和7年度以降の入学生を対象としているため、一部の科目はまだ開講されておらず、初回の修了者が出るのは早くも令和9年度となる見込みである。なお、プログラムを構成する科目のうち、必須科目の半数は既に開講されており、学生が履修を進めやすい仕組みを整えている。また、学部・学科のガイダンスにおいて情報の周知を行い、履修を促進している。 自己点検・評価体制については、本学において令和5年度より設置されている数理・データサイエンス・AI教育推進分科会に加え、工学部を中心とした応用基礎レベル推進部会において、履修促進に向けた計画策定とPDCAサイクルによる改善を体系的に進める予定である。
学修成果	本プログラムは令和7年度以降の入学生を対象としており、現時点でプログラムのすべての科目が開講されているわけではないため、学修成果をプログラムとして評価することは現段階で難しい。令和9年度以降に、学生アンケート等により学修成果を評価する予定である。また、令和8年度入学生より、工学部ディプロマ・ポリシーに「数理、データサイエンス、AIに関する知識とスキルを活用し、デジタル技術の進展に対応した新たな価値を創造する能力」を掲げている。卒業時にディプロマ・ポリシーにある能力等を主観でどの程度身につけられたと感じるかを問うアンケートを毎年実施しており、その回答結果からも学修成果を評価できると考えている。
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度	学期ごとに実施している学科毎の授業評価検討会および学部での授業評価総合検討会により学生の理解度について検討した。具体的には、成績評価B以上の割合(60%以上を基準)、学生アンケートによる授業内容の理解度に関する項目(5段階で3以上を基準)について検討し、理解度については本プログラムで令和7年度に開講されたすべての科目でクリアした。一方で、成績評価については、プログラミング関連科目で基準に達していない科目があり、主に指導方法の改善について検討した。
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度	本プログラムは令和7年度以降の入学生を対象としており、現時点でプログラムのすべての科目が開講されているわけではないため、他の学生への推奨度は評価できない。今後、プログラム修了学生が出てきた段階で、学生アンケート等により調査する予定である。
全学的な履修者数、履修率向上 に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは、工学部を対象とした応用基礎レベルの教育プログラムであるため、現時点での履修者数および履修率向上に向けた取組は、工学部を中心に進めている。令和7年度以降の入学生を対象として開始しているため、現時点では履修対象学年が限定されており、履修者数や修了者数は今後段階的に増加していく見込みである。プログラムを構成する必須科目については順次開講を進めており、各学科の専門性に応じた選択必須科目を配置することで、学生が自らの専門分野と関連付けながら履修しやすい構成としている。履修者数および履修率の向上に向けては、工学部内の学科ガイダンス、履修指導、シラバスや履修モデルを通じた周知を継続的に行うとともに、学内の数理・データサイエンス・AI教育推進体制とも連携しながら、履修状況の把握、課題の整理、改善策の検討を進め、PDCAサイクルに基づく改善を図っていく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは工学部を対象として令和7年度入学生から開始しているため、現時点では修了者はまだ出ておらず、進路や活躍状況、企業等からの直接的な評価については今後把握していく予定である。一方で、本学では、リテラシーレベル認定・再認定への対応やコンソーシアム会合への参加を通じて、数理・データサイエンス・AI教育に関する社会的要請や他大学の動向、産業界の期待に関する知見を蓄積してきた。今後は、修了者の進路状況、企業等からの意見、産学連携や外部会合を通じて得られる知見を踏まえ、本プログラムの教育効果の検証と改善を進めていく。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは、データサイエンス・AIの基礎的知識を学ぶだけでなく、各学科の専門分野に応じたドメイン知識と結び付けながら、課題発見・課題解決に活用する力を育成する構成としている。これは、産業界において求められる、データやAIを各領域の文脈に応じて活用できる人材の育成という観点からも重要である。また、演習や課題解決型学習を通じて実践的に学ぶ手法を取り入れている点も、本プログラムの特徴である。今後は、コンソーシアム等の会合、産学連携、インターンシップ、外部関係者との意見交換等を通じて得られる産業界の視点も踏まえながら、教育プログラムの内容・手法の継続的な改善を図っていく。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	本プログラムでは、内容・水準を維持・向上しつつ、学生にとってより分かりやすい授業とすることを重視している。講義に加えて、演習、課題解決型学習、実データを用いた分析、および、振り返りを取り入れることで、数理・データサイエンス・AIの内容を具体的な実践と結び付けながら理解できるよう工夫している。また、各学科の専門分野との関連を意識した授業設計により、学生が自らの専門との接点を踏まえて学べる構成としている。さらに、社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえ、推進体制のもとで授業内容や方法を継続的に見直し、教育効果の向上につなげていく。
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	本プログラムでは、内容・水準を維持しつつ、より分かりやすい授業とするために、講義に加えて演習、課題解決型学習、実データを用いた分析、発表や振り返りを組み合わせた授業設計を行っている。基礎的内容を段階的に学べるようにするとともに、各学科の専門性に応じた科目を通じて、学生が自らの専門分野との関係を意識しながら理解を深められるよう工夫している。さらに、社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえ、数理・データサイエンス・AI教育推進分科会および応用基礎レベル推進部会において、授業内容や方法を継続的に点検・見直し、シラバス、教材、演習課題等の改善を図ることで、教育効果の向上につなげていく。また、学期ごとに開催される授業評価検討会(学科単位)、授業評価総合検討会(学部単位)においても、科目ごとに内容、水準等について検討し、科目レベルでの改善を進めていく。